

アジア

ラクロス部



学生記者
HAKUMON
CHUO UN
Knowledge
大学
UMON
UNIVERSITY
中.
CHUO
HAKUMON

日本代表(U-22)に 選出

パンファイック 選手権を制覇

佐々木淳選手(経済4)

小松勇斗選手(商3)

学生記者 中村美咲(文1)

ラクロス部の佐々木淳主将(経済4)、小松勇斗選手(商3)の2人が、6月21～29日に韓国・慶州市で開かれた「第9回APLUアジアパシフィック選手権」(ASPAC=アスパック)に日本代表(22歳以下、U-22)として出場し、優勝に貢献した。2人は「日本を背負って戦うという思いで、気が引き締まった。チームの一体感で勝てた」と、国際大会での得難い経験を振り返った。アスパックは2年おきに開催され、日本はU-22、豪州はU-23、その他4カ国はフル代表が出場した。日本は6連覇を達成した。

決勝直前、 気持ちを高めた ミーティング



決勝の豪州戦の日、宿舎でのミーティングで、互いの役割を確認し合い、「決戦」に向けて士気を高めた。「やることは準備できているな?」。平田基樹・代表ヘッドコーチの言葉に、選手一人ひとりがやるべきことと、決意を述べていく。

バスケットボールにたとえばジャンプボールのように、プレーの最初にボールを相手と奪い合うポジション、フェイスオフ(FO)の佐々木選手は、「審判が合図の笛を鳴らすタイミングが日本と異なる。(他の試合で)審判のくせを覚え、試合の流れを呼び込む」と気合を込め、攻撃専門のアタッカー(AT)の小松選手は、豪州に先制され予選で敗退した轍を踏むまいと、「入り」の部分で大切に、試合の流れをつかむために先制すると気持ちを高めた。

小松選手は「勝つぞという気持ちで臨んだ。優勝へのプレッシャーはなかった」と振り返る。予選初戦の

香港戦にフル出場し、2得点を挙げたが、大会直前に負った左足首のねんざが悪化。その後の予選2試合を欠場し、「試合に出たい。何のために(韓国まで)来たのか」と唇をかみ、我慢を強いられた。しかし、それが決勝でのやる気、熱意につながったのだ。日本は幸先よく先取点を挙げる。小松選手は4-3とリードした場面で、さらに相手を突き放す

ゴールを決め、「豪州は強豪で、ゴールを決めたのは特にうれしかった。ガッツポーズが自然と出た」。チームも9-4で快勝した。

それでも、国際大会の雰囲気は独特なのだろう。佐々木選手は「もしここ(決勝)で豪州に負けたら、日本に帰れないくらいの気持ちでした」と正直な思いも打ち明けてくれた。



アジアパシフィック選手権での小松選手のプレー

試合前の国歌、 日本代表としての自覚

2人とも今大会が初めて経験する国際大会。初めて「JAPAN」のユニフォームにそでを通した。口をそろえて話したのが、「試合前、フィールドに国歌が流れたときに気持ちが高ぶった」ということだ。普段は大学の校歌が流れるところで君が代が流れ、国際大会で日の丸を背負う責任を意識したという。

さらに、外国人選手とのフィジカルの違いも痛感したようだ。身長や脚の長さ、体幹の強さなど、日本人選手との差は小さくなかった。自分より体の大きい選手との対戦で注意していたことを尋ねると、佐々木選手は「相手より先を読んで動き、相手を思い通りに動かさないこと」を挙げ、小松選手は「持ち味の一つである足の速さを生かし、スピードや緩急をつけた動きで優位に立つこと」と強調した。体格の大きな選



©2019 Kevin Kobayashi

フェイスオフで相手とボールを奪い合う佐々木選手(右)

手とのぶつかり合いは、国際大会ならではの貴重な経験といえそうだ。

ラクロス部 「日本一への挑戦」

2人が所属する中央大学ラクロス部は、「学内外から愛される部会」をモットーとして掲げる。全日本大

学選手権、関東学生リーグ戦での優勝を目標に、部創設以来の悲願である「学生日本一」を目指して練習に取り組んでいる。主将でもある佐々木選手は、「一昨年に関東でベスト4となり、徐々に追う立場から追われる立場になりつつある中で、勝ち続ける集団になっていきたい。学生日本一を今年、達成して、その

「7秒で1点のスピード感」 ☆ラクロス

先端に網のついたスティック(クロス)を用い、硬質のゴム製ボール(直径6センチ、重さ150グラム)を奪い合って相手ゴールを目指す。北米発祥とされ、米国とカナダにプロ・リーグのチームがある。フィールドは約100×55メートル。1試合は各15分の4クォーター

制。アメリカンフットボールのような激しい肉弾戦、サッカーのようなスピーディーかつダイナミックな選手の動き、シュートの速さなどが魅力。ヘルメット、マウスピース、エルボー(ひじ)、ショルダー(肩)の防具を装着する。試合展開の目まぐるしさは「わずか7秒で

1点が入る」(佐々木選手)というほど。少々のリードでも油断はできず、展開次第では大逆転も可能だという。女子ラクロスは体のぶつかり合いが禁止など、ルールが男子とは異なる。

経験を下の世代に伝えることで、恒常的に勝てる強いチームにしたい」と力を込める。

ラクロス部は9月16日の関東学生リーグ今季最終戦で、立教大に勝利。10月5日の関東準決勝(ファイナル4、駒沢オリンピック公園第1球技場)への進出を決め、目標の日本一に一步近づいた。

今年は、他の大学チームから「中央が強い」という評価が聞かれるが、前年まではなかった評価だという。

昨年冬に新チームに代わったときから、ラクロス部はチームの在り方を変えた。「学年に関係なくコミュニケーションを図れる組織」を目指し、いわゆる「Aチーム」「Bチーム」の序列をなくし、戦力を均等にした

レッドチーム、ホワイトチームによる練習試合を重ねてきた。つまり、力の拮抗した紅白戦を行い、チームの底上げを図るという狙いだ。その中で、技術の高い上級生と経験の少ない下級生のコミュニケーションも生まれる。

また、2018年まで日本代表ヘッドコーチだった岩本祐介さんが、中大のスポーツメンタル・テクニカルコーチに就任。試合への準備の仕方、チームや個人がうまくいかないときにどうポジティブにとらえて対処するかといったメンタルトレーニングなどの指導を受けている。佐々木選手は「新しい視点で(個人やチームを強化する)計画を立てられ、質の高いことをできている」と実感している。

9年後に 五輪競技の可能性



ラクロスは9年後の2028年の米ロサンゼルス五輪で競技として採用される可能性がある。佐々木選手は「五輪競技になれば日本での知名度も上がる、何より出場したい」、小松選手も「その頃には自分たちは30代ですが、選手として活躍したい」と話した。30代の代表選手はラクロスでは珍しくないという。

2人とも中大を卒業後も社会人チームなどでラクロスを続けるつもりだ。日本代表選手として大きな舞台に立つ姿を心待ちにしたい。



豪州の選手と競り合う小松選手(中)



今大会で初めて「JAPAN」のユニフォームにそでを通した佐々木選手(右)と小松選手

☆小松勇斗 選手(こまつ・ゆうと)

176センチ、74キロ。東京都出身、佼成学園高卒業。商学部3年。ポジションのアタッカー(AT)は、スティックを使ってディフェンスをかわしながらゴールを狙う。佐々木選手と同様、小中高校と野球をしていた。高校では遊撃手。全員が初心者からのスタートのラクロス部に入部を決めた。「昔からスポーツでは攻撃が好き」と言い、ラクロスも最初からATに興味があったという。今年2月から日本ラクロス協会の全国強化指定選手。

☆佐々木淳 選手(ささき・あつし)

168センチ、75キロ。東京都出身、日大二高卒業。ラクロス部主将で経済学部4年。ポジションのフェイスオファー(FO)は2年生の夏から務める。試合開始やゴールが決まった後の再開時、相手選手と体をぶつけ合ってボールを奪い合い、ゲームの流れを決める大切なポジション。小中高校と野球を経験。高校では投手、外野手だった。「本気で日本一を目指す」ラクロス部にひかれて入部。今年2月から日本ラクロス協会の全国強化指定選手。

☆中大ラクロス部の日本代表、U-22 日本代表選手

時期	学年	氏名	ポジション	選出カテゴリ	出場大会	結果	
2002年		佐藤 英明	DF	日本代表	世界選手権大会(W杯)		2001年3月卒業
2011年	4年	遠藤 竜郎	MF	U-22日本代表			
2013年	4年	中澤 寛	AT	U-22日本代表	APLUアジアパシフィック選手権大会(ASPAC)	優勝	
	3年	小澤 徹也	MF				
2014年	4年	小澤 徹也	MF	日本代表	世界選手権大会(W杯)		
2015年	4年	小湊 陸	MF	U-22日本代表			
	4年	大牧 孔明	DF				
2017年	4年	安江 将史	G	U-22日本代表	APLUアジアパシフィック選手権大会(ASPAC)	優勝	
2019年	4年	佐々木 淳	FO	U-22日本代表	APLUアジアパシフィック選手権大会(ASPAC)	優勝	
	3年	小松 勇斗	AT				

(注)DFはディフェンス、MFはミッドフィールダー、Gはゴールキーパー

躍進！一致



あなたは第九十八回東日本学生相撲選手権大会において頭書のとおり優秀なる成績を収めましたよってここにその栄誉をたたえこれを賞します
 令和元年六月九日
 東日本学生相撲連盟

「団体戦は学生相撲の東日本学生相撲選手権」

國結の相撲部



醍醐味」
は個人・団体ともに優勝

写真提供=中大スポーツ新聞部

相撲部が好調だ。今年6月の第98回東日本学生相撲選手権大会をはじめ、4月の第36回全日本大学選抜相撲宇和島大会、5月の第29回全国選抜大学・社会人対抗相撲九州大会は、いずれも個人戦、団体戦ともに優勝を飾り、大学相撲界屈指の名門として輝きを放っている。7月の第46回東日本学生相撲個人体重別選手権大会（無差別級）は、優勝の菅野陽太選手（法3）、準優勝の田中大介主将（文4）、3位の西川登輝選手（法3）の中大勢が上位を独占した。昨年、菅野選手が学生横綱となった勢いを相撲部全体が引き継ぎ、好成績が続いている。

多摩キャンパス第一体育館の相撲場を訪ねると、体のぶつかり合う甲高い音が土俵に響きわたっていた。稽古中の表情は全員が真剣そのものだ。

土俵上で男同士が一对一でぶつかり合う。相撲は個人と個人の戦いだ、相撲部の選手に取材するまでは漠然と思っていた。しかし、

それだけではなかった。「個人より団体戦で勝ちたい」。選手から同じ言葉が口をつく。切磋琢磨する中で、同じ相撲道を究めようと思う者同士の連帯感が生まれるからだろう。もちろん、大相撲の矢後関、一山本関の中大OBの活躍も励みになっている。

「毎日一緒に稽古して、切磋琢磨

して他の大学に勝つというのが学生相撲の醍醐味。プロの世界にはない魅力だと思います」。2006年からコーチを務め、自身も相撲部OBの山口弘和監督はそう話す。

「前に出るように、攻めるようにと指導しています」。そう、「前へ、前へ」が中大相撲だ。それが前監督の平岩大典・現OB会長の教えでも



多摩キャンパスの相撲場。稽古をする選手たちの表情に緊張感がみなぎっていた



住木巖太選手(右)



菅野陽太選手(左)

☆第98回東日本学生相撲選手権大会(6月9日、両国国技館) 団体戦優勝メンバー

田中大介選手(文4) たなか・だいすけ

相撲部主将。183センチ、180キロ。愛媛・野村高卒業。高校の恩師も中大OB。体を生かした「前に出る相撲」を貫く。6月の東日本学生相撲選手権大会は個人戦でも優勝。中大勢63年ぶりの個人・団体の2冠を達成したが、「皆でまとまって戦う団体戦の優勝が特にうれしい」と話す。

中村悠星選手(法4) なかむら・ゆうせい

170センチ、140キロ。高知・明德義塾高卒業。「体は小さいが、押し相撲を徹底したい。個人戦も上位に行きたい」と胸に秘める。そのためには「稽古での四股やテッポウが大事」。5月の全国大学選抜相撲宇佐大会では敢闘賞(4位)。

西川登輝選手(法3) にしかわ・とうき

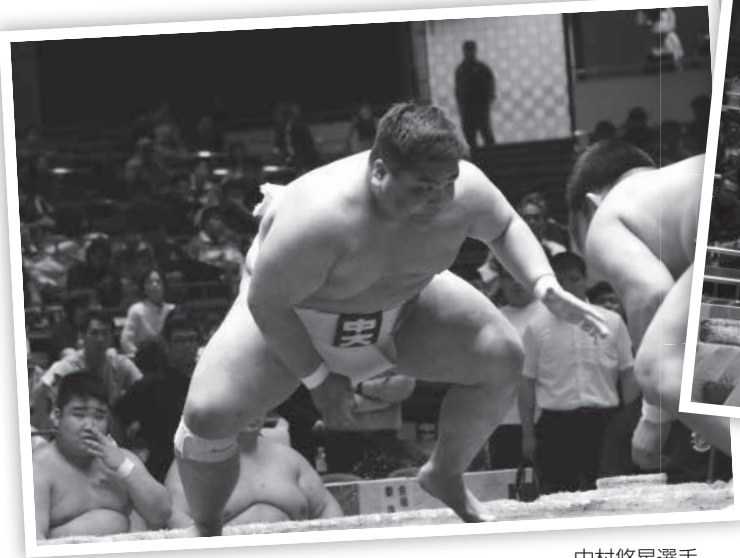
177センチ、150キロ。埼玉・埼玉栄高卒業。将来の目標は大相撲の力士。高校の監督の勧めで中大に進学。出身(大阪府寝屋川市)が同じ豪栄道関があこがれの存在。「下がらず前に出る相撲」を常に意識している。5月の全国選抜大学・社会人対抗相撲九州大会は個人戦でも優勝。

菅野陽太選手(法3) かの・ようた

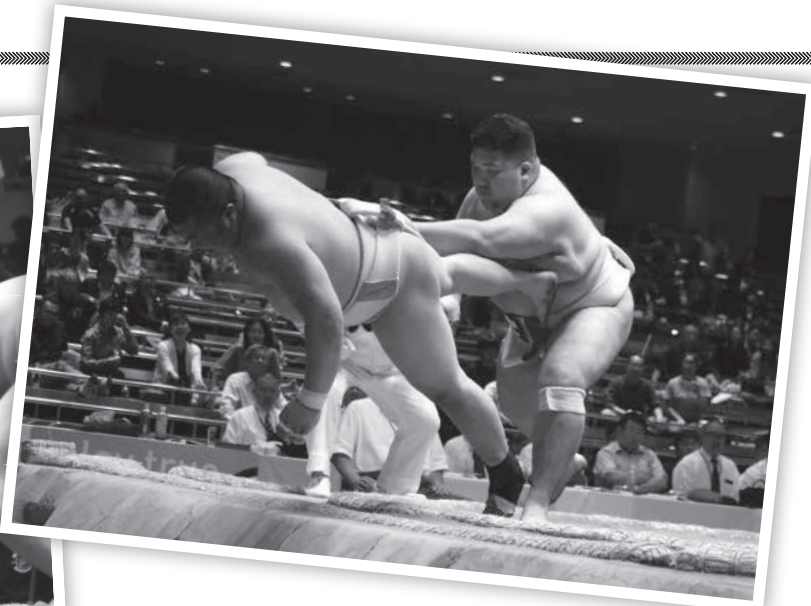
180センチ、150キロ。和歌山・箕島高卒業。得意は右四つ。昨年11月の全国学生相撲選手権大会・個人戦で優勝し、中大勢17年ぶりの学生横綱となった。「稽古は一人ではできない」と、アマチュアにしかない団体戦にも魅力を感じている。

住木巖太選手(法2) すみき・げんた

181センチ、135キロ。愛媛・野村高卒業。2年生で唯一の優勝メンバー。7月の第46回東日本学生相撲個人体重別選手権大会(135キロ以上級)で3位の成績を収めている。本人は「突き押し相撲を究めたい」と力を込める。



中村悠星選手



西川登輝選手

あるという。

98回目の開催と学生相撲の大会で最も古く、伝統のある東日本学生相撲選手権の団体戦は、主将の田中と西川、菅野の各選手、中村悠星選手(法4)、住木厳太選手(法2)の5人が名を連ねた。5人とも高校時代からインターハイや国体などで好成績を収めた実力者ぞろいだ。

団体戦の決勝は3連覇を狙った東洋大が相手。田中主将が勝って優勝を決めた。その瞬間、土俵下の仲間が思わずガッツポーズしている姿が目に入り、「責任を果たせてよかった」と^{あんど}安堵したという。

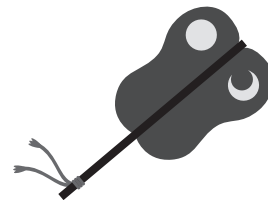
山口監督は「何か特別なこと(稽古)をしているのかとよく尋ねられますが、特別なことは何もしていない」と語り、不断の稽古の成果がそのまま最近の好成績となって表れているとみている。土俵上での自信も稽古の積み重ねによって裏打ちされているといえる。

大目標の全国学生相撲選手権大会が11月に控えている。東洋大、日体大などライバル校も強い選手がそろい、油断は大敵だ。学生相撲の

強豪校は月1回程度、各地で開かれる相撲大会に出場する。強豪選手同士の対戦の機会も少なくなく、全国学生相撲選手権で上位に残るライバルたちと普段から競うことになる。

山口監督は「選手はそれぞれの大会で気を抜かないでほしい。(相手に)自信をつけさせたり、『なんだ、勝てるじゃないか』と思わせたりしないように、『もう勝てない』

と感じさせるくらいに、どの大会も全力を尽くして、土俵で隙のない相撲を取ってほしい」と期待をかける。勝利への秘策は稽古、日々の精進以外にない。



田中大介選手(右)

学生記者に なりませんか?

『HAKUMON Chuo』は
中大生が取材・編集する
大学広報誌です。
現在、学部在生を対象に
学生記者を募集しています。

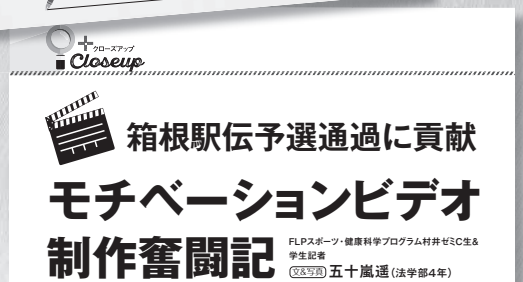
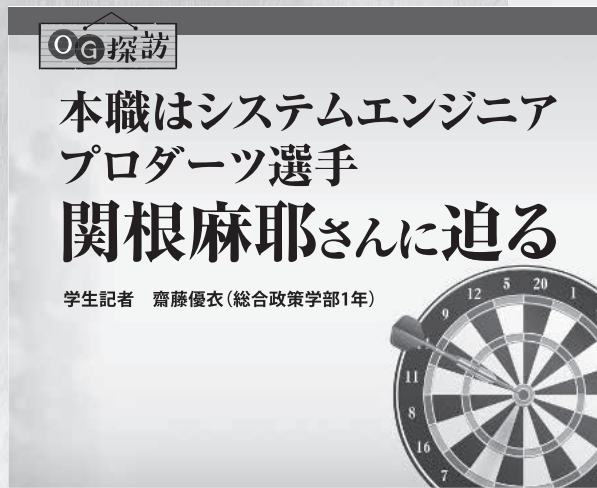
- 元新聞記者のプロや先輩の学生記者に、取材方法・原稿の書き方をはじめ添削指導を受けることができます。将来どんなキャリアを目指すにも文章力が重要です!
- 取材を通して、さまざまな人に出会うことができます。出会いの数ほど思い出ができることでしょう。
- 記者活動を通してコミュニケーション能力など「社会人基礎力」を身につけることができます。



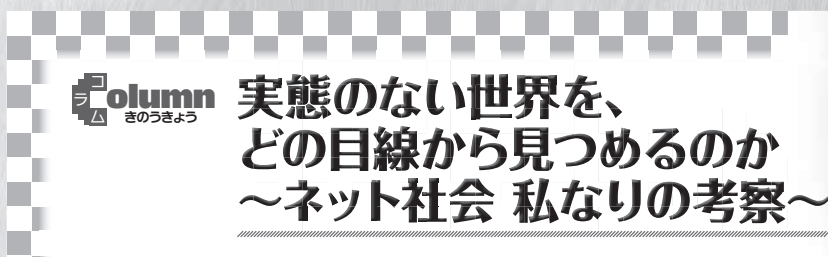
**剥製標本、骨格標本を請負制作する
内田晃氏は中大理工学部卒**
保存状態良ければ「100年、200年は大丈夫です」
学生記者 片桐将吾 (法学部4年)



**憧れの報道番組キャスター
中大4年生が日テレ
「news zero」で奮闘中**
学生記者 山田 亮太郎 (法学部4年)



文&写真
学生記者 津田 翔 (法学部2年)



【お申し込み・お問い合わせ】

中央大学広報室『HAKUMON Chuo』 編集担当：北村豊 Phone：042-674-2048 (直通) E-mail：hc@tamajs.chuo-u.ac.jp

「剣さばき」「雄たけび」 間近で見えて実感、



が圧巻

フェンシングの 魅力

学生王座決定戦を取材

中大スポーツ新聞部記者 大島千穂 (法3)

「第69回全日本学生フェンシング王座決定戦」が6月2日、京都府の大山崎町体育館で開かれ、フェンシング部が男子フルーレ、男子サーブルをともに制した。男子フルーレは14年ぶり、サーブルは3年連続の王座獲得だ。

5月の関東リーグ、関西リーグのフルーレ、サーブル両種目の上位各2校がトーナメント方式で争うこの大会には例年、関東と関西の強豪が集結。選手たちはインカレの前哨戦と位置づけ、しのぎを削る。中大男子フルーレ、サーブルとも11月のインカレに向け、幸先の良いスタートとなった。

優勝した男子フルーレの上野優斗選手
(写真提供=中大スポーツ新聞部)



男子フルーレの優勝メンバー

中大勢V 男子フルーレ14年ぶり、 サーブルは3年連続

男子フルーレの中央大の初戦の相手は立命大。1セット目から永野雄大選手(法3)がリードを許したが、3セット目で上野優斗選手(法2)が逆転、そのままリードを広げ45-39(総当たり戦による45点先取)で勝利した。決勝の相手は慶大。好調な上野選手に加えて、石井魁選手(総合政策2)も「耐えしのぎました。役割を果たせた」と胸を張り、45-29で14年ぶりに王座を奪還した。

日本選手権でも上位に入る選手が集う中大の男子フルーレ陣。実力派ぞろいのチームも不思議と学生大会の優勝から遠ざかっていたため、試合後の選手たちの顔はうれしさに満ちあふれていた。インカレは

もちろん大事な試合だが、上野選手や永野選手が見据えるのは世界の舞台だ。チームとして切磋琢磨しながら個々の技術も高め合い、日本の代表としてさらに活躍してほしい。

一方、男子サーブルの中大が最初に挑んだのは同志社大。相手に隙を与えず45-18で圧勝した。決勝の相手は最大のライバルの日大。中大と日大でジュニア世界大会のメンバーを構成したことがあるほど、互いに実力者ぞろいだ。

一進一退の攻防が続く中、スピードが持ち味の日大に対し「頭を使って相手をだますプレー」(渡邊裕斗主将・商4)で下し、3年連続で王座を勝ち取った。男子サーブル(団体)は学生大会35連勝となり、連勝中に敗れた試合は昨年、一昨年の全日本選手権決勝だけ。連勝数がどこまで伸びるかも今後の楽しみの一つだろう。

騎士道に魅了される

フェンシングの大会に初めて私が足を運んだのは2年前だった。ルールも完全には理解しないまま取材したものの、フェンシングの剣さばきや選手の雄叫びに圧倒され、気づいたら、すっかり「騎士道」に魅了されていた。

長さ14メートル、幅1.5~2メートルのピスト(試合場)のそばで試合を見ていると選手の動くスピードや、チームメイトとの言葉のやり取り、試合の臨場感を観客席よりも間近に感じられる。中大スポーツの記者をやっているよかったと思う瞬間のひとつである。

いつも笑顔で取材を受けてくれる選手たちが、真剣な表情で剣を振り、仲間と勝利を喜び合う姿には心を動かされる。五輪メダリストの太



男子サーブルの優勝メンバー

田雄貴氏がフェンシング界の改革を行っている中、フェンシングの魅力、中大フェンシング部の活躍を伝えることができるのは本当にうれしいことだ。

注目度が上がっているフェンシングの魅力は生で見たほうが実感できる。手に汗を握る熱い試合をぜひとも自分の目で確かめてほしい。

フェンシング競技の3種目 「フルーレ」「サーブル」「エペ」

フルーレは、背中を含む胴体への攻撃が有効となる種目。攻撃は「突き」のみで、先に腕を伸ばし剣先を相手に向けた側に攻撃の「優先権」が与えられ、相手に剣を払われたり、間合いを切って逃げられたりす

ると、優先権が相手に渡る。攻防をめぐる瞬時の技の応酬が見どころとなっている。

サーブルは、頭や腕を含む腰から上の上半身への攻撃が有効となる。攻撃は「斬り」と「突き」。フルーレと同様に優先権にのっとりゲームが進行する。攻撃の要素に斬りが加わることで、より激しい攻防が展開される。

エペは、頭からつま先までの全身への攻撃が有効で、攻撃は「突き」のみ。先に突いた方がポイントを獲得し、同時の場合は両者にポイントが入る。全身が攻撃対象となることなどから、変化に富んだ試合展開が魅力だ。



男子サーブルの渡邊裕斗選手(右)

「チームワークの良さ」が勝因、12



拳法部が全国 選手権大会で

月の全日本学生選手権に弾み



大学選抜 2年ぶりV



拳法部(男子)が6月の「日本拳法第32回全国大学選抜選手権大会」で2年ぶりに優勝した。初戦から圧勝続きで危なげなく頂点に立ち、最大目標である今年12月の全日本学生拳法選手権大会に向けて、チームに一層の自信を植え付けた大会となった。最優秀選手賞には岩津風太選手(法3)が選ばれた。

圧勝続きで頂点へ

「やれると思って臨みました。予想はしていませんでしたが、結果的に圧勝だったと思います」と生駒将梧主将(法4)は胸を張った。

35大学が出場した大会は6月16日に東京武道館大武道場で開催。先鋒、次鋒、中堅、副将、大将の5人同士が対戦(3本勝負の2本先制で勝利)し、勝ち越したチームが次

戦に駒を進めるトーナメント方式で争われた。

中大は2回戦(1回戦は不戦勝)の桃山学院大戦で全員が勝って5戦全勝、続く3回戦(名古屋学院大戦)は4勝1敗、準々決勝(大阪商業大戦)は3勝1敗1引き分け、準決勝(関西大戦)は5戦全勝で勝ち進み、決勝に進出した。

決勝の相手は、全日本学生拳法選手権大会を7連覇中の明治大

学を破って勝ち上がった龍谷大学だったが、4勝1敗で難なく撃破。直接対決ではないものの、前年、明大に決勝で敗れた雪辱を果たしての優勝だった。

生駒主将が挙げた最大の勝因は「チームワークの良さ」だ。戦いの場では対一の個人戦だが、団体戦では柔道や相撲のように一人ずつ順番に戦う。チームワークの良さがあれば、勝って勢いがつき、負



最優秀選手賞に選ばれた岩津風太選手の勇姿

■中大拳法部 日本拳法第32回全国大学選抜選手権大会出場メンバー

先鋒	岩津 風太(法3)	175センチ、83キロ
次鋒	伊藤 優(商3)	165センチ、75キロ
中堅	横井 竜太(法1)	176センチ、83キロ
副将	伊藤 弘海(文4)	183センチ、107キロ
大将	生駒 将梧(法4)	176センチ、82キロ

(注) 決勝戦のみ先鋒・伊藤優選手、次鋒・岩津選手

けても後ろ向きなムードにはならない。

中大トリオの「MVP」争い

生駒主将は、練習では緊張感をもって、気合の入った声を出し合

い、練習以外ではなるべく上下関係がなくし、和気あいあいの雰囲気づくりを心掛けてきたという。それが優勝という形で実を結び、「楽しんで試合ができた」とも振り返った。

「あまり考えずに楽しんでこい

よ」。決勝戦の直前、生駒主将は、先鋒の伊藤優選手(商3)に、そう声をかける“余裕”も生まれていた。「1、2年生の頃は感情的になってしまう短気なところがあったが、今は冷静に試合に臨んでいます」と生駒主将は話す。ほどよい



緊張とリラックスした感覚、そして充実感が生駒主将をはじめチームにみなぎっていたと言えそうだ。

決勝に次鋒として出場した最優秀選手賞の岩津選手は、組もうとして近づいた柔道経験者の相手に鮮やかな「面突き」、カウンターの突きをアッパー気味に繰り出した「面上げ打ち」で2本を取り、わずか30秒で決着をつけた。2年前の1年生のとき、全日本学生拳法選手権大会で敗れた因縁の相手に圧勝した。

最優秀選手賞も、岩津選手、生駒主将、中堅の横井竜太選手の中大トリオが候補として争ったとみられる。頼もしい限りだが、12月の全

日本学生拳法選手権は7人同士が対戦して勝負をつけるという、よりチームの底力が試される大会だ。負傷で今回は欠場した川下拓人選手(経済2)ら実力者の復帰も期待されている。

岩津選手は「もっと強い下半身を作り上げたい。思い通りのフットワークを使えば相手の攻撃を自在にかわせます」と自身の課題を挙げた。チーム全体も「勝って兜の緒を締めよ」。浮ついたところはない。12月の大一番がますます楽しみになってきた。



□日本拳法(拳法)

面と胴、グローブ、股当てなどの防具を装着し、こぶしと蹴りの打撃技と、投げ技、寝技で戦う武道。体重差による階級はない。ボクシング、キックボクシングなどにも選手を輩出している。中大拳法部は男女31人が在籍。

